第３１１回（3 月 14 日開催）

「グローバリズムの新潮流－東アジアの時代を迎えて－」

高崎経済大学　経済学部教授　武井　昭氏

東西冷戦が終わって、アメリカの独り勝ちになったとたんに「グローバル」という言葉が出現した。

グローバリゼーションは「IT革命」によってもたらされた

90 年代から始まった情報通信の革新的な変化の中で、空間のワールドから、今はネット上のワールドになった。ネットは空間概念を飛び越えたのである。どちらもアメリカの支配である。

World－Nation－Community から、Global－Region－Local への構造シフト

工業化社会から情報化社会への転換が、今日のグローバリゼーションをもたらした。これまでの World は、その中にさまざまな「Nation＝国家」が散らばっていた。国と国との間が「インター・ナショナル」、国の中のたとえば都道府県は「インナー・ナショナル」である。これが工業化社会の構造であった。

ところが、情報化社会は Nation を区切っていたボーダーを無くし、Nation を軸にした構造概念を変えた。情報化社会が工業化社会の構造を崩した。これまでの「World－Nation－Community」の図式から、「Global－Region－Local」の図式への転換である。

Global は全地球。Region は地理的、機能的、社会的、文化的特徴による広い地域・地方。Local は特定の地域に限られた場所をさす。現に、ＥＵは Region で動いている。

もし、中国が世界経済に本格的に参画してくるとすれば、米、EU、日本による三極構造から、米、EU、東アジアないしは BRICs といった新しい全体構造－グローバル構造が出来上がってくることになる。

世界中の金が中国や BRICs に投資されてバブル経済を起こしている。サブプライムローンはその１つの象徴であり、世界中が大混乱である。この過剰資金がもたらすさまざまなリスクの問題と、新興国を含む経済のあらたな発展ということとはグローバリゼーションの表と裏であり切っても切れない関係にある。

問題の根本にあるのはアメリカである

アメリカが金本位制度を放棄して以来、基軸通貨であるはずのドルが単なる数字に変わってしまった。すべての国において常識であるはずの外貨準備、それが米国には存在しないという問題をどう考えるか。

「世界の東京」である東京には、日本の Global 化の中心としてしっかり機能してもらう必要がある。同時に、もう一方の存在たる地方が Local としてしっかり機能していなければ、全体としての日本が成り立たない。それが、Global－Region－Local の原理である。

たとえば SCM である。SCM―Supply Chain Management―が重要な経済要素だと気付いて産業界がそれに取り組んでいって、社会にそういうシステムを構築した。大変な成果をあげた。だが、全体という立場に立ってみると、これは「右手」に相当する。

そこで、では「左手」には何があるかと考える。すると、そうか、Supply Chain が不可欠ならば、それに呼応する Demand Chain もまた不可欠である。そこで DCM というコンセプトが生まれてくる。

あらためて東洋とは何か。すこし、触れたい。

EU はキリスト教文明をベースに地域を作り上げようとしている。したがって必ずしも近代文明に対して一辺倒ではない。一方、米国は近代文明に対して危惧の念をあまり持っていない。む

しろ近代文明を起点にして彼らなりの近代文明にどんどん進化させていっているといえよう。

日本や中国の場合はどうか。もともと東洋という異なる文明の上に西欧近代文明がのった国では、その影響が緩和されて弊害が少ないという感覚になる。その結果が、公害の発生などに対しても、鈍感で、問題に気づくのが遅れるということになっている。

西洋の根本にあるのは神である。この世で全体がわかるのは神一人であり、人間には全体はわからない。そこで、全体を分けていって、その中から、わかるところだけをシステムとして取り込んでくる。すべてはそこから出発する。あいまいなものが排除されて、物事が論理的で明快で、筋道がきちんと通っている。

対して東洋はどうか。全体はわからない。わかるかわからないか、わからない。だから、懸命にわかろうとして、どこまでも頑張る。そして、全体はここまではわかっているということを示そうとする。どこまでも基本を「全体」というところに置いているのが東洋である。ところが、それが西洋からすると「あいまい」と映るのである。仏教においては、素晴らしい言葉があるので、幾つかご紹介する。

「不悟至道」。これは、悟ることは永遠に無理である。正しい心を持って道に至ることを決意する、という意味である。

「乃能究尽」。これは、如実であることを自覚する、という意味である。

「辨道工夫」。この意味は、分らないことは頑張れ、ということである。

仏教経済学のこれから、日本のマネジメントのこれから

経済学における言葉は、アダム・スミスの頃は「生物学用語」であった。たとえば「コスト」という言葉は「犠牲」という意味で、「罪と罰」という神との関係の中で、神に「犠牲」を払って「益」、すなわち「ベネフィット」を得るということから始まっている。コストが「費用」という意味になったのはずっと後である。

さて、経営の問題だが、私は、経営の基本は、会社という自分たちの組織をいかに機能させていくかということにある。たとえば、年功序列制度である。この制度は年長者が偉くなっていくシステムで、年を重ねれば偉くなれるということは、若者たちにとっても希望を持たせる制度だといえる。

世界が激動期にあることは人々に現実に感じられるようになった。グローバル化という形で推進することの是非が問われて、その対策として Regionalism があるとされ、EU の実験になっている。

中国ほどの人口大国が工業化に完全に成功するには並大抵ではない。その時に日本の 140 年間の試行錯誤の経験が中国にとって貴重なデータになるはずである。そのデータの中核部分が仏教にある。その根本は、無条件に眼前に存在する事実に対して無条件にその本性を明らかにすることである。